

ネットワークを活用した学び合いによる 中国人留学生のプレゼンテーション能力育成の試み

佐藤 克美*, 渡部 信一*

*東北大学大学院教育情報学研究部・教育部

要旨：中国人留学生の数は増加傾向にあるが、彼らはプレゼンテーションを苦手とする。そこで中国人留学生の日本語によるプレゼンテーション能力を育成するために、ネットワークを活用した留学生同士の学び合いを行った。掲示板には表現や態度についてのフィードバックが多くされ、留学生も表現や態度について各自修正したと述べていた。また、日本人による評価では学び合い後にプレゼンテーション能力が向上した傾向があることが明らかとなった。他の学習者から個人的なエラーについてのフィードバックが与えられ、それを映像で見て確認したことによりプレゼンテーションが向上したと考えられた。

キーワード：プレゼンテーション、中国人留学生、ネットワーク、学び合い、日本語

1. はじめに

現在、日本で学ぶ留学生は13万人を超えており年々増加傾向にある。その出身国としては中国からの留学生が最も多く全体の6割を超えている。そしてその多くは大学・大学院への入学・進学のため来日している。彼らの多くは母国で日本語を何年か学んだ後留学、もしくは日本の日本語学校等で日本語を学んだ後に入学するが、比較的高度な日本語能力を持つとされる学生でも日本語に困難を抱えている。特に日本語を学ぶ中国人は「会話」や「話す」ことを苦手としているとされる（小野里 2010, 福永 2013）。

ところで、日本では社会的な要請もあり学生のプレゼンテーション能力の育成が求められている。そのため、大学でも講義やゼミ等の場面でプレゼンテーションを行う機会が多くある。三浦ら（2006）は、プレゼンテーションの要素を、内容（必要な表現・伝える内容）と方法（見せ方・話し方や態度）に分けている。また山下ら（2010）は市販されているプレゼンテーション関連の書籍を調査し、プレゼンテーションに必要な能力を内容検討・資料作成・話し方・動作態度に分類している。これらから、プレゼンテーション能力育成のためには、大きく「内容」「資料」そして「話し方・表現の仕方」「態度」の育成が必要であると考えられる。しかしながら、大学の講義等でプレゼンテーションを扱う場合、その性格上、

特に内容に関しての議論が中心となり、話し方や表現の仕方等についてまで指導されることは多くない。将来、学生が社会に出てよりよいプレゼンテーションを行えるように学生時代に内容だけでなく総合的にプレゼンテーション能力を高める必要がある。

留学生も日本の大学では講義等でプレゼンテーションをしなければならない。そして、そのプレゼンテーションの多くは日本語でなされる。日本語を話さなければならないいうえ、中国では学生時代に人前で発表する機会がほとんどないこともあり、中国人留学生の多くはプレゼンテーションを苦手としている。さらにプレゼンテーションは、話す・聞く・読む・書くのすべての言語能力が必要であるため、その能力を高めることは留学生の日本語能力を総合的に高めることにつながると思われる。そのため、中国人留学生がよりよく日本で勉学・研究に励むことができるよう彼らの日本語によるプレゼンテーション能力を高める支援が必要である。

プレゼンテーション能力育成のためには、実際にプレゼンテーションする機会を多く経験する必要がある。しかし、講義時間内にプレゼンテーションの練習を行う場合、発表に時間がかかるため、学生が発表する機会や、指導時間や議論する時間が十分に取れないという問題がある。

留学生によると発表中、自分の声、視線や姿勢がどうなっているのかわからず、発表用の原稿を正し

く書いて読んだとしても相手に伝わらないことが多いといい、留学生向けに話す態度の育成に特化した講義もされている(正宗 2006)。しかし、日本人学生もいるような普通の講義で留学生の日本語、視線や態度を指導することは難しい。

また、日本語の誤用に関しては他者からのフィードバックが効果的であるという(大関ら 2010)。プレゼンテーションでも自分の発表の問題点を指摘してもらい場が必要であろう。しかし、発表後に教員や他の学生がその問題点を指摘したとしても、発表者は自分が何と言ったか、どのような様子だったかについて覚えていないため、フィードバックが生かされないことが多い。さらに一度発表した内容を再度発表するような機会は多くない。そのためそこで学んだことを修正して発表する機会を持つことができず次に生かされない。つまり留学生のプレゼンテーション能力向上のためには実際に繰り返し発表する機会を確保しつつ、冷静に自分の様子を振り返えたり、フィードバックを得ることができるような学習環境が求められる。

そこで、これらの問題を解決し、留学生の日本語プレゼンテーション能力を育成する一つの方法として、ネットワークを活用した留学生同士の学び合いが役立つのではないかと考えた。本研究では留学生各自の発表の様子をビデオで撮影し、インターネット上にアップロード、その映像を自分で見て反省したり、他の留学生に見てもらい問題点等についてフィードバックしあう活動を行った。そして、ネットワークを活用した学び合いが、留学生の日本語プレゼンテーション能力の育成に効果があるかどうか検討した。

2. 講義実践

対象とした学生はT大学大学院に所属する中国人留学生6人である。どの学生も日常会話は日本語で可能であり、日本語能力試験の資格上では高度な日本語を駆使できる程度(N1・N2)とされる者である。対象者の日本語学習歴と日本語能力試験の資格は以下のとおりである。

- A：中国の大学に在学中2年間独学で日本語を学習(N2)
 B：大学卒業後来日し2年間日本語学校で学習(N

2)

- C：中国の大学で日本語を専攻し4年間学習(N1)
 D：大学卒業後来日し2年間日本語学校で学習(N1)
 E：中国の大学で2年間日本語を専攻し学習したのち日本の大学へ留学しさらに2年間日本語を学習(N1)
 F：中国の大学で日本語を専攻し4年間学習(N1)

6人の留学生は1週間に一回程度集まり、その中の2人～4人がプレゼンテーションを行い、質疑応答を行った。質疑応答では内容に関しての質問を中心とした。発表する内容は他の講義で行う予定のものやゼミ等で発表するために用意したものなどである。そして各留学生のプレゼンテーションの様子を撮影したビデオ映像を動画教材としてT大学のeラーニングシステムにアップロードした。留学生は後でインターネットを介しその映像を見て、自分の発表について振り返った。また他の留学生の発表も視聴し、映像を見て気がついた点や質問をeラーニングシステム上の掲示板に自由に書き込みをした。掲示板にコメントされた留学生は、その記述を読んで自分の発表の修正に役立てたり、疑問や意見があれば掲示板に再度投稿した。このように留学生同士がお互いの映像を視聴し合い、フィードバックし合いながら自分の発表を修正し、修正したものを再度発表した。

各留学生は一つの発表につき、修正を加えながら2週間に1回の割合で3回発表を行った。そして、それが終わると発表テーマを変えて新しい発表を行い、各留学生が3つのテーマについて3回ずつ、計9回の発表を行った(図1)。

9回の発表終了後、日本人により留学生のプレゼンテーションを映像で見て評価してもらった。また、留学生らに自分が注意して練習した部分についてアンケート形式で記入してもらった。

3. 実践の結果・考察

3.1. 留学生の活動

聴衆の留学生は一回のプレゼンテーションに対し一人平均4つのフィードバックを掲示板に記入して

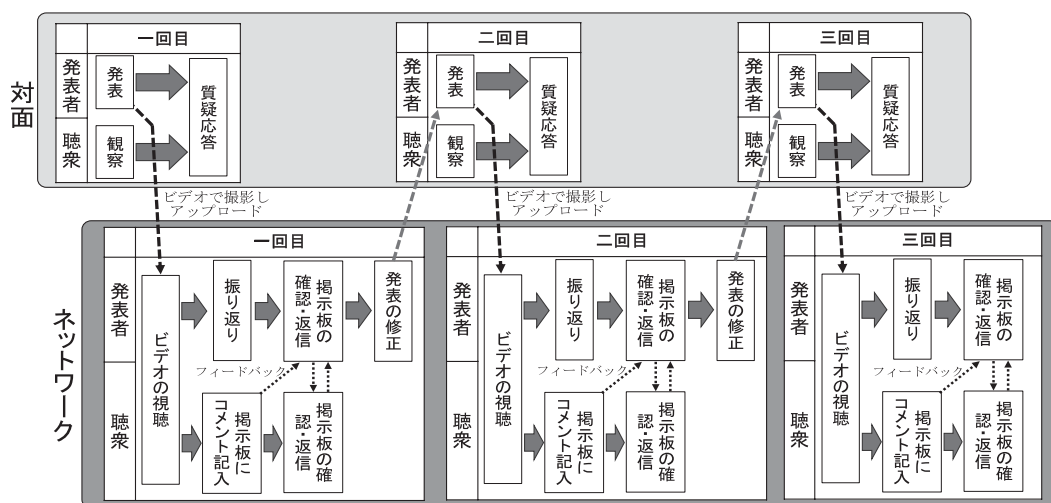


図1. 実践の流れ

いた。留学生が掲示板にコメントした内容を見ると、「発表する時、目があちらこちらを向いている」、「『て』が『で』になっている」、「『あ』と『え』の発音がはっきりしない」、「××をスムーズに読めるよう練習をした方がよい」、「語尾のイントネーションがおかしい」など視線や態度、発音や流暢さに関するものが中心であった。日本語に関するコメントは、量は多くないものの『私が』より『私は』の方が良い」という文法上の修正に関するものや、『さんざんやりました』よりは『たくさんやりました』の方がよい」といった言い回しに関する修正点などが指摘されていた。

ネットワークを活用した学び合いを通して、自分が注して練習した部分について聞いたところ以下のような答えだった。

- A：「なんか」と言ってしまう癖があることに、ほかの人からの指摘ではじめて気が付いた。それで、「なんか」と言わないように気を付けた。
- B：読み間違いを何度も指摘されたのでもっと練習したい。はじめの方は「です」と「である」が混在していると指摘されたが、最後には「である」に統一して話せるようになった。
- C：文の最後が聞き取りにくいと指摘されたので、意識して語尾まではっきり発音するようにした。文法には多くの間違いがあったことに気がついたので、注意を払って発表してきた。

D：はじめは声が小さかったが、最後の方は聞き取りやすいよう大きな声で話した。

E：はじめのうちは段々視線が下向きになっていたといわれたので直すようにした。

F：「あの」という口癖を指摘されたが、最後は少なくなった。

掲示板のコメントに書かれた内容は「口癖」「発音の特徴」をはじめとしたその留学生だけに見られる日本語の問題点（本稿では「個人的なエラー」と呼ぶ）に対してのフィードバックが中心であった。そのため注意して練習したところも自分の癖や発音に関する部分となったのであろう。

3.2. 日本人による評価

日本人大学院生6人が留学生の1回目と最後の9回目のプレゼンテーションを映像で見て評価した。プレゼンテーション能力には「内容」「資料」「話し方・表現の仕方」「態度」があるが内容や資料は1回目と9回目で異なる。そこで、評価は話し方や表現に関する「表現」、視線や姿勢などの「態度」について行った。そしてそれに日本語の文法の正確さ等「日本語」の評価を加えた。評価した項目は、「表現」として、発音の正確さ・声の大きさ・話すスピードと流暢さ、「態度」として視線と表情・姿勢と態度・癖、「日本語」として、文法の適切さと

表1 日本人(6人)による留学生のプレゼンテーションの評

留学生A										留学生B										留学生C									
		1回目				9回目						1回目				9回目						1回目				9回目			
評価		1	2	3	4	1	2	3	4	評価		1	2	3	4	1	2	3	4	評価		1	2	3	4	1	2	3	4
表現	声量	0	2	0	4	1	2	1	2	声量	0	2	3	2	0	2	2	2	声量	1	2	1	2	0	1	3	2		
	発音	0	5	1	0	0	0	5	1		*	4	2	0	0	3	2	1		*	1	4	1	0	0	1	4	1	*
	流暢さ	0	3	3	0	0	0	4	2		3	2	1	0	1	1	3	1		1	5	0	0	0	0	0	5	1	*
態度	視線表情	0	1	5	0	0	3	2	1	視線表情	2	4	0	0	0	1	5	0	*	視線表情	3	3	0	0	0	4	2	0	
	態度	2	2	2	0	0	1	4	1		*	0	4	2	0	0	0	6	0		1	4	1	0	0	1	5	0	
	癖	1	5	0	0	0	0	4	2		*	1	4	1	0	0	1	4	1		3	3	0	0	0	0	5	1	*
日本語	文法	0	3	3	0	0	0	6	0	文法	0	3	3	0	0	1	4	1	*	文法	2	3	1	0	0	1	4	1	*
	語彙	0	2	4	0	0	1	3	2		1	4	1	0	0	2	2	2	2		4	0	0	0	2	3	1		

留学生D										留学生E										留学生F									
		1回目				9回目						1回目				9回目						1回目				9回目			
評価		1	2	3	4	1	2	3	4	評価		1	2	3	4	1	2	3	4	評価		1	2	3	4	1	2	3	4
表現	声量	2	2	2	0	0	1	3	2	声量	0	0	4	2	0	2	2	2	声量	0	0	2	4	0	1	2	3		
	発音	0	3	3	0	0	1	2	3		0	1	5	0	0	0	3	3		0	2	2	2	0	0	2	4		
	流暢さ	0	0	6	0	0	4	2	0		0	0	5	1	0	0	2	4		0	3	2	1	0	0	3	3		
態度	視線表情	0	5	1	0	0	2	2	2	視線表情	0	3	3	0	0	0	1	5	*	視線表情	0	2	2	2	0	0	1	5	
	態度	0	4	2	0	0	0	3	3		*	0	0	4	2	0	0	2	4		0	2	2	2	0	0	1	5	
	癖	1	4	1	0	0	1	3	2		*	0	0	5	1	0	0	3	3		0	2	4	0	0	0	2	4	*
日本語	文法	0	0	6	0	0	0	5	1	文法	0	0	4	2	0	0	1	5	文法	0	0	6	0	0	0	3	3		
	語彙	0	1	4	1	0	0	5	1		0	0	5	1	0	0	3	3		0	0	3	3	0	2	4	0		

評価者は6人。各項目の数字はその評価(1~4)をした人数。

表中*はウィルコクソンの符号付順位と検定で $p<0.05$

使用する語の適切さである。なお、評価はアンケートに4件法(1 不適切・2 やや不適切・3 やや適切・4 適切)で回答してもらい、評価者らにはどちらのプレゼンテーションが1回目もしくは9回目なのかについては知らせなかった。また、上達したかどうかを確認するために1回目と9回目でウィルコクソンの符号付順位と検定を行った(表1)。

1回目と9回目では発表した内容が変わっており、発表者の服装等でどの時期の発表か推察もできるため、必ずしも公正な評価にはなっていない可能性があることに注意しなければならないが、どの受講生も1回目より9回目のほうが評価は高くなる傾向が見られ、いくつかの項目では有意差も確認できた。

日本語の上達については、留学生は普段から日本語を活用し生活しているため本実践の効果だけとは言い切れない。しかしプレゼンテーションについて留学生は本実践以外に練習してはいないので、表現や態度に関する項目は本実践により上達したところが大きいと思われる。また、表1からは「発音」や「癖」などに有意差が見られる者が多いことがわかる。これは3.1で留学生らが練習したと言っている通り、個人的なエラーが修正されたことが理由と考えられる。

3.3. ネットワークを活用した学び合いについて

日本語の発話学習ではフィードバックを与えることが効果的であるが、全ての誤用に対しそれを行うことは不可能である。したがって、教室での学習の場合では、多くの学習者が行いがちなミス、またその誤用により意味が通らなくなるようなミス(グローバル・エラー)に対してのフィードバックが中心となり、個人的なエラーは見逃されることが多い。その結果、個人的なエラーがいつまでも修正されないという問題がある(大関 2010)。また個人的なエラーを大勢の前で指摘されるのは学習者にとってあまり気分が良いものではないため指導者もフィードバックをためらうことが多い。

しかし、ネットワークを活用した学び合いでは、個人的なエラーに対するフィードバックが行われていた。また、日本人による評価でもその点について修正されたと評価された。これは、直接その場で指摘するのではなく、あとでから掲示板を活用して行ったことで個人的な問題について指摘しやすくなったことと、逆に指摘されてもあまり恥ずかしく感じないことが理由と考えられる。そして映像でそのフィードバック内容について自身でも冷静に確認できたことが修正につながったと思われる。

本研究では、ネットワークを活用し、プレゼンテーションをお互いに観察しフィードバックしあうことで個人的なエラーを修正でき、日本語プレゼンテーション能力を育成できる可能性があることがわかった。

しかし課題もある。本研究では比較的日本語レベルの高い少数の大学院留学生を対象としている。学部の留学生や、日本語レベルが高くはない学生の場合に同様の上達が見られるかは疑問が残る。今後はより多くの留学生、学年、日本語レベルでの検討が必要である。

参考文献

- 福永美香 (2013) 中国の大学における日本語会話の指導法について. 尚絅大学紀要人文・社会科学編, 45: 21-33
- 正宗鈴香 (2006) 日本語口頭発表技能のための実践的指導法の開発ー話す態度を身に付ける取り組みー. 麗澤大学紀要, 83:209-228
- 三浦香苗, 岡澤孝雄, 深沢のぞみ, ヒルマン小林恭子 (2006) アカデミックプレゼンテーション入門. ひつじ書房, 東京
- 小野里聡 (2010) 日本語能力試験1級と上級日本語学習者から見えてくる課題:中国人留学生の事例から. 新潟経営大学紀要, 16: 183-190
- 大関浩美, 白井恭弘 (2010) 日本語を教えるための第二言語習得論入門. くろしお出版, 東京
- 山下祐一郎, 中島平 (2010) プレゼンテーション能力の評価方法確立のための書籍調査とその評価法を用いた情報システムの開発. 教育情報学研究 第, 9: 63-70

An Effort to Develop Presentation Skills of Chinese Students by Mutual Learning Utilizing Computer Networks

Katsumi SATO*, Shinichi WATABE*

*Graduate School of Educational Informatics, Research Division/Education Division, Tohoku University

ABSTRACT

Chinese students have issues with presentations. For the purpose of cultivating Chinese students' presentation skills in Japanese language, mutual learning among them making use of networks has been conducted. Chinese students have stated that they have adjusted their respective expressions and attitudes thanks to many feedbacks having provided on bulletin boards regarding the expressions and attitudes. In addition, it has also been suggested from evaluations by Japanese that Chinese students' skills have been improved. It has been thought that the provisions of feedbacks concerning characteristic misuses of each individual from other learners have contributed the improvements of Chinese students' presentation skills.

Key words: Presentation, Chinese students, Computer Network, Japanese Language, Mutual Learning